大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

リヒテンベルクとフランス革命

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2011-12-15
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 船越, 克己
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006296

リヒテンベルクとフランス革命

船越克巳

一

フランス革命（一七八九）とそれに続く時期に関する同時代のドイツの文学者の言及は単に、革命に対するpro oder kontra（賛成か反対か）の図式にとうてい収めきれるものではない。[1] かれらの発言は常にそのコンテキストの中へ戻して眺めなくてはならない。例えば戯曲『庶出の娘』（一八〇三）に取り組むゲーテの念頭には、貴族と市民の融合というテーマがあった。隣国では第三階級が公然と政治の舞台に登場した。そこから押し寄せて来た衝撃の覚めやらぬ間に、ゲーテは貴族と市民、換言すれば理念と実践の結合こそ、ドイツに適した体制であると考えた。それはワイマル宮廷とゲーテの結びつき、ならびに当時のワイマル社会の特殊性[2]がなければ、おそらく生まれなかったテーマであろう。根っからの宮廷人ではないシラーとは自ずから異なるゲーテ的テーマ設定である。

フランス革命の勃発当時、ドイツの知識人がこぞって革命の問題に頭を悩ましていたというのは当たらない。それは今日のアクチュアルな諸問題がその重要性と先見性にもかかわらず、皆がそれを日常不断に論じるわけではないのと同様である。しかしながら他方では、フランス革命がドイツの知識人に与えたインパクトと情報量の大きさの著しさも、また現代のアクチュアルな諸問題が放出するそれにも等しい。それらによりわれわれが新しい時代を手っ取り早く感じるように、かれらも隣国の政治、社会の大変動の情報によって、新しい時代の動きを敏感に感じ取った。この意味でフランス革命は陰に陽にかれらの意識を支配していたと言えよう。一七九二年、主君カール・アウグスト公の軍隊と共に、フランス干渉戦争を体験したゲーテは三十年後、『フランス出征』において、フランス革命の時代を「世界史の新たな一時代」[3]と呼んでいる。ゲーテ自身、盟友シラーと共に『クセーニエン』（一七九六）の時期にいかにフランス革命とその影響にあらがったかは、二人の往復書簡によってもその一端がうかがえる。やがてゲーテは新しい「世界史」の時代を認識して、『西東詩集』（一八一九）の冒頭で次のように歌う。

北と西と南は砕かれ、
王座は裂け、王国は震える、[4]

われわれはもう一度、フランス革命がドイツの文学者に与えた衝撃の度合いは個々人まちまちであること、そしてかれらのフランス革命観の差異にもかかわらず、ドイツは他のヨーロッパ諸国と共に「世界史」を形成する時代に入っていたことを確認しておきたい。その上でわれわれは以下にリヒテンベルクとフランス革命の問題を論じたい。

二

W・レーデルはリヒテンベルクとフォルスターを論じた先駆的著書『フォルスターとリヒテンベルク――ドイツの知識人とフランス革命の問題に関する論考』[5]において、二人の関係を就中フランス革命を軸にして論述している。フォルスターおよびリヒテンベルクのフランス革命観については、本書を越えてなお究明すべき余地はあろうが、ここにはフランス革命期の二人の関係については決定的な事項がのべられている。レーデルは、フォルスターの死後、リヒテンベルクの書いた二通の書簡を取り上げる。次にその肝心な部分を引いておく。

> 実はわたしはこの卓越した男を最近すっかり見失ってしまいました。かれの文学的仕事でさえ、わたしは知らないままでしたし、ましてかれの政治的仕事にわたしは賛同することはできませんでした。（アルヒェンホルツ宛、一七九四・六・一六）

> わたしはこの男をたびたび思い出しますが、まことにもの悲しい気持なしには思い出すことはできません［……］ああ、もしわたしが昔ながらにまだ子供のない人間で、将来を案ずることなく、自由に考え、自由に著述する人間であれば、かれのために何枚かの追悼をいや進んで捧げたでありましょうに。（ゼンメリング宛、一七九五・六・五）

レーデルがその著作の中で一番問題にしているのは、この二通の手紙にみられる「矛盾」である。リヒテンベルクはフォルスターの文学的仕事も、政治的仕事も知っていたのではないか、とレーデルは推測する。「しかしフォルスターの道にリヒテンベルクは同意を表明することはできない。フォルスターの高遠な理論の穹窿はかれの賛意を得てはいる。しかし実際的な実現に際しては、『溝の上にしっかりした橋一本渡すこと』さえ、フォルスターにはできなかった、とリヒテンベルクは考える。」[6] レーデルはこの辺にリヒテンベルクとフォルスターが分かれていく事情の「要点」があるとみる。リヒテンベルクの目にはフォルスターの革命理論は受入れ可能なものと映ったが、かれの実践はその理論を一寸たりとも実現するものとは思えなかったのだ。われわれはここにマインツ革命前まではフォルスターと歩調を合わせていたが、革命家フォルスターとはしだいに袴を分かつドイツの知識人との共通点を確認する。実のところ、フォルスターたちがマインツをフランス共和国に譲渡したことに対し、リヒテンベルクもそれを苦渋に満ちた気持で眺めていた一人である。[7]

リヒテンベルクはフォルスターのように革命の理論家、実践家ではなく、ゲッティンゲン大学の物理学教授として、フランス革命の成行きを傍観しているにすぎなかった。しかし詳しくみれば、果してどこまでフォルスターは革命の理論家であり、他方リヒテンベルクは革命についてどのような考えをもっていたか、という問題は当然出てくる。レーデルは言う。「フォルスターは資本主義の発展をいまだ展望することができず、従って資本主義からの解放の道をまだ知ることができなかった。[8]」しかし、フォルスターの市民的コスモポリタニズムの背景を問うことはそう容易なことではない。翻ってリヒテンベルクのフランス革命観はどこに記されているのだろうか。「ドイツの支配勢力を恐れていたリヒテンベルクは、自分の考えを書簡ではまるごと打明

けることはしていない。しかしかれのアフォリズムのノートの中では、かれは矛盾を孕んだ姿をずっと明白にわれわれにみせる。」[9] しかしながら書き物はなべて、何らかの制約の下に成立するものであるから、われわれとしてはそれが手紙であれ、『付け込み帳』のノートであれ、そこに記されているリヒテンベルクの革命に関する記述は、それをそのまま参照することにしたい。

レーデルは主としてリヒテンベルクの二通の手紙を検討することによって、フランス革命をめぐるリヒテンベルクとフォルスターの接近と離反を巧みに説明している。しかし「フランスのでき事が単に啓蒙主義的な観点からはもはや理解され得なくなっている」[10] という矛盾は、独りリヒテンベルクのみに当てはまるのではなく、革命家フォルスターについても言えるのである。

リヒテンベルクが、フォルスターは「幾多の偉い計算家」と同じように、「溝の上にしっかりした橋一本渡すこともできない」とのべ、革命の実践家たるフォルスターを一蹴したことは一見奇妙にみえる。革命の舞台から傍観している者が革命家フォルスターの実践について、実に素っ気無くコメントしているからである。しかし他方、ドイツ啓蒙主義の遺産を分かつこの二人はフランス革命に対する相手の態度の正当性と限界についても、はっきり認識できたことは想像に難くない。それではレーデルの主張するように、リヒテンベルクはフォルスターの実践のユートピア性を見抜いたゆえに、この革命家から別れて行ったのであろうか。

事情はいささか違うと考えられる。ドイツの知識人にとって、フランス革命の経過はかれらの精神的基盤を沈めかねない大事件であった。雑誌「ホーレン」（一七九五年刊行）や『クセーニエン』によるシラーやゲーテの活動とは異なり、リヒテンベルクの場合、フランス革命の余波の中で自らの文学的使命を実戦的に貫くことはしなかった。例えばコッタから「ホーレン」の編者の一員になるよう勧められたリヒテンベルクは丁重にそれを断っている。「そうでなくとも大したことのなかったわたしの執筆癖はほとんど日一日と減退しています。そしてわたしはますます厳密な意味での単なる読者になりつつあります。」（J・F・コッタ宛、一七九五・九・一八）このように自らを悟るリヒテンベルクにとって、いかにフランス革命の結果は苦いものであれ、フォルスターの革命活動は批判の主たる対象ではなかったのではあるまいか。マインツ革命後のフォルスターからリヒテンベルクが遠ざかっていたのは事実であるが、それでもフォルスターは「幾多の偉い計算家」の一人にすぎなかった。ましてやリヒテンベルクが革命家フォルスターと共に文筆家フォルスターを葬ることはできなかった。

確かにフランス革命の時代にリヒテンベルクとフォルスターを結びつけていたのは文筆であった。一七九一年の夏、フォルスターはリヒテンベルクから「やっと一通の手紙」（ハイネ宛、一七九一・七・一二）をもらう。リヒテンベルクはその間、大病を患い、衰弱し切っていた。「わたしのような人間がたとえ一万人いても、測鉛を机の上へ持ち上げられるかどうか」とフォルスターに訴えている。（一七九一・七・一）しかし、体力の消耗と引換えにリヒテンベルクは「病時に鋭い観察の才能」を自覚した。かれはフォルスターより送られた『ニーダーラインの観察考』第一巻を非常に称賛し、それを「ドイツ語で書かれた第一級の作品の一つ」と呼んだ。『観察考』を自分ほど理解し、心底より評価する者はいないと自負している、とまでフォルスターに伝えている。『観察考』第二巻は第一巻以上にリヒテンベルクの気に入った。

（フォルスター宛、一七九二・五・二七）リヒテンベルクが文筆家フォルスターに一目置く理由は、フォルスターが「一つ一つの観察にたったの一語によって個性を与える天分」（フォルスター宛、一七九一・七・一）をもっていたからである。

『観察考』の著者にドイツ最高の作家の「名声」を認めて憚らぬリヒテンベルクは、文筆家の仕事を発展させてくれる嫡子を見出したのである。リヒテンベルクは善意な意味においても、いわゆる「流行作家」を拒絶した。（フォルスター宛、一七九二・五・二七）そもそも書物とはリヒテンベルクにとって、それが思考へ誘う力をもたなければ、三文の値打ちもなかった。逆に読者は常に「核心」（„Sachen"）と「言辞」（„Wörter"）を峻別する必要に迫られる。（G・六八）[11]「考える手間を省くために読書する人間が、実際のところ非常に多くいる」（G・八二）と、かつてリヒテンベルクはおのが憤懣を『付け込み帳』に記している。悟性を信じると同時に、その不確かさをも経験した啓蒙主義者の苦渋の告白がここにある。ホフマンスタールの「チャンドス危機」の一つの原型がここに見られる。一七九二年秋のいわゆるマインツ革命以後、リヒテンベルクはフォルスターの姿を「見失って」いたのではなく、実は追跡している。[12] しかもかれはこの革命家に進んで背を向けたわけではない。理論家フォルスターと実践家フォルスターを分離し、後者をどうしても受入れることができなかったがために、「リヒテンベルクはフォルスターと別れる」（die „Differenzierung Forsters und Lichtenbergs"）というのが、レーデルの主張である。[13] しかし早計にそのように断じることはできない。たとへ二人の関係は以前のように親密ではないにしろ、また少なくともフォルスターからみるとリヒテンベルクは遠ざかって行くように思えたにしろ、である。リヒテンベルクは実は革命家フォルスターを切捨てたのではなく、かれを視野に収めつつ、最終的にはフランス革命そのものを自己の思考の対象としていたようである。

隣国の革命に対する、リヒテンベルクの観察態度は啓蒙主義者にふさわしく真摯であった。革命についてもおそらくかれは「非常に多くのことを思索した〔……〕書物を読んだ以上のことを。」（J・六四〇）革命の舞台から遠く離れていた、この孤独な男が「四方の壁の間で」（フォルスター宛、一七九一・七・一）行った程の緻密な思索を、当時のドイツの知識人のうち果して何人が成したであろうか。元来、体系に欠けるリヒテンベルクの思索は、シラーのような美的教育論を、W・v・フンボルトのような近代国家論を生み出すことはできなかった。しかし、リヒテンベルクは決して思索を放棄しなかった。思索に耽るこの箴言家は『付け込み帳』に続けて言う。「それゆえにわたしは世間の人たちが知っている非常に多くのことを知らない。だからそれゆえにわたしが世間へ出て行くとき、しばしばわたしは思い違いをする。そのことがわたしを遠慮がちにさせる。」（J・六四〇）ここに吐露されたリヒテンベルクの心の風景は、それを突き詰めれば、かれの思考の特徴、かれの文体の特徴と不思議に繋がっている。

先に引いた「溝の上」の「橋」の譬えは決してフォルスター一人を揶揄したものではなく、彼此の革命家に向けられたものであろう。しかし重要なことはそれはまさしくフランス革命そのものに対して放たれた、批判の矢であったということである。

三

「時間のほかに大きな変革を引き起こすもう一つの手段がある。それは — 暴力（*Gewalt*）である。前者があまりにもゆっくり進行するのに対し、後者はときどき先回りして事を行う。」（J・八八〇）『付け込み帳』J（一七八九—一七九三）の後半にはフランス革命に対するリヒテンベルクの真剣な模索の跡が見られる。K（一七九三—一七九六）にもフランス革命に関する著者のコメントが散在する。そして、ノートJとKにはリヒテンベルクのフランス革命に対する見通しが、より鮮明になっていく様、つまり模索から展望へ変化していく様がうかがえる。それには一七九三年一月二一日のルイ十六世の処刑が一定の影響を及ぼしている、と考えられる。ドイツの多くの知識人を唖然とさせ、革命への共鳴、期待を冷ましたのが、革命広場での刑の執行であった。リヒテンベルクはノートに書き込む。「フランス革命がどんな結果をもたらすかは、やはりおぼろげに予見することができる。ヨハン・フスは火刑にされたが、ルターはされなかった。あのときは三十年にも及ぶ戦争が起こったが、このときは宗教改革が成される。」（K・一四二）ノートJがフランス革命に向けられた、リヒテンベルクの探索の書とすれば、Kは革命に対する評価の書でもあった。フランス革命の「結果」はおおよそ「予見」可能となっていた。先に引いた「時間」による社会の変革か、それとも「暴力」による変革かに関する危惧は、一七九三年の王の処刑によって、はからずも後者の形をとって実現された。「暴力」が事を遂行したのである。

しかしながら、リヒテンベルクはルイ十六世の処刑は恐ろしい、それは悪だと、道徳的に憤慨して事足れりとはしなかった。王の処刑という行為がフランスでいったい何を引き起こしているのか、そして今どんな社会的力学がフランスで働いているのかを考える。「ルイ十六世の殺害によって人々はフランスの蛮人の諸原則に敏感になった。以前はそうではなかったが。あの行為はそれによって諸原則を人々に分かりやすくした言葉であった。あの殺害に対し報復をするために、今では多くの者が以前では決してやらなかったであろう事をやっている。」（K・一）大規模に反革命的行為がなされる。そのような雰囲気の中で、多くの人々も王擁護の気分に変わる。従順な気分は王に対する「愛情」ではなく、「恐怖」のためである、とリヒテンベルクは断じている。特に小国における支配者による臣下の操縦術は法、即王の威光に頼る場合が多い。このようにフランス王の処刑に関し、リヒテンベルクが道徳的嫌悪感の吐露ではなく、それによって社会がどう動くかに思いをはせていることは注目してよい。一七九三年一月の事件はリヒテンベルクにフランス革命に背を向けさせたのではなかった。

リヒテンベルクは「全人類の幸福」のために一つのモデルを作り、それを検討する。「結局、全人類の幸福が…政治（…*kratie*）にあるとすれば、ところでわれわれはこの合成語の最初の語を全く知らぬし、あるいは数学者の慣用に従って例えばX°政治と記すこともできるかもしれぬが、誰がこのXを定めようとするのか。ある友人はキリスト政治と読んだ。わたしの心の真底から言わせてもらえば、わたしはこのXの値に何ら異議はない。もしキリストという語の意味に関し、きちんと一致しさえすれば、ないしこれほど明白な意味を気侭勝手に誤解せぬつもりであるならばだ。しかし、この了解が幾多の宗教改革と幾多の三十年戦争によってしか得ることはできぬことを恐れるものである。」（K・一六）このX値という問題設定からリヒテンベルクの思考

の面目躍如たる様がうかがえる。かれは一つのドグマから出発することはない。かれの思考は類似や相似を求め、それを比較することに無二の楽しみを見出していた。こうしたフランス革命に対する相対的思考はリヒテンベルクにおいて、終始変わることはなかった。「一七八一―八九年の八年間と一七八九年―九七年の八年間で、革命という語が何度ヨーロッパで口にされ、印刷されたかを表す数字の比率を見てみよう。その比率は一対一〇〇〇〇〇〇より小さいことはまずなかろう。」（L・二八六）百万倍と数字化することで、何と事の経過がはっきりすることか。同じ自然科学者の精神で、かれは次のようにも記した。

「実験政治、フランス革命」（L・三二二）

四

リヒテンベルクの心情の世界でフランス革命の経過が不安をかき立てなかったというのではない。F・Hマウトナーによれば、「革命の来たるべき最終結果に対する最初の懐疑」をリヒテンベルクが語るのは一七九三年四月であるという[14]―「フランスでは発酵している。ワインができるか、酢ができるかは定かでない。」（J・一二四九）つまり、革命が成功するか、失敗するかは不明であると言っている。確かに革命に対する生理的恐怖をリヒテンベルクは感じていたに違いないが、かれはそれを巧みな譬えで客観化する。ワインの比喩は別の個所にも用いられる。「今フランスで殉教者のワインが流れている。」（J・五七八）これはフランスでたくさんの首をはねている「ギロチン」（J・一〇四〇）を指摘している。リヒテンベルクはまた次のようにも記す。「ミラボーから逃れよ、しかして街灯を恐れよ。」（J・五八五）ミラボーとは「あらゆる可能な方法で専制的暴力を欲しがり、従来の配列を廃止し、市民をおびき寄せ、かれらに違法な心情を吹き込んだおしゃべり屋で、扇動者」（J・九七九）であった。

革命（Revolution）とは元来、天体の回転を、例えば惑星が太陽の回りを回転する運動を指す。それがいわゆる国家革命の意味に用いられるのはフランスでは十七世紀であり、ドイツではフランス革命の影響でやっと十八世紀の終わり頃になってからだという。[15]従ってリヒテンベルクがフランス革命を天体の運動から説明するのもさして唐突ではない。

> われわれの世界体制は君主国家である。太陽はその廷臣をもつが、しかしながら、高官を少し遠ざけておく。太陽はしかし、かれらにかれらの小惑星を容認する。そこからあるいは現在の政治革命をぴたりと言い表す一つの寓話（Fabel）が作られるかもしれない。衛星が反乱を起こし、まさに太陽の回りを回転しようとする。（J・八五八）

「L・二八六」の比率が示すように、「革命という語」はフランス革命以前のドイツにはほとんど用いられなかった。隣国で革命が勃発した。いったい何が起こったのだろうか。「革命という語」があるよせよ、その実体は把握できない。そこで自然科学者リヒテンベルクの模索が始まる。まず「寓話」を叩き台にする。ところで「寓話」を文学ジャンルまで高めたのはレッシングである。寓話はレッシングにとっ

ては「真実」に接近する手段であった。「詩人の自由な造形の可能性は、種々の偶然を分離することにより『神的原像』に近づく、かれの能力の中にある。その際、ふだんは人間に知覚されぬ宇宙の秩序が一断面の中にすら見えてくるのである。」[16] それゆえ、寓話とは一つの「真実」、「神的」な典拠として存在し続ける。リヒテンベルクにとってもかれの描く天体の寓話は可視的真理として文学的機能を果たす。それでは革命の結果、それまでの衛星が新たにそこを中心として回転する「太陽」とは何であろうか。それは別の個所で言われている「啓蒙主義という太陽」（J・八八五）なのである。

ここにわれわれは啓蒙主義者リヒテンベルクのフランス革命観の出発点を見ることができる。革命も宇宙の秩序を乱すものではなかった。「太陽」、すなわち「啓蒙主義」が革命の指導原理なのである。リヒテンベルクにとって啓蒙主義はまさに時代を照らす「火」であった。「わたしは啓蒙主義のしるしとして、周知の火のしるし（△）を提案したい。火は光と熱を出し、それはすべての生きものの成長と進歩のために不可欠である。ただし―不注意に取扱うとそれはやはり燃え、破壊することもある。」（J・九七一）啓蒙主義は太陽、すなわち火であるがゆえに、革命という火口さえあれば、社会の進展の種火としてその原動力となりうるのだ。リヒテンベルクにはルイ十六世の処刑後も、人類の進歩という概念による革命への期待は消えることはなかった。時と共に人間はもはや「締めつける」ことはできなくなった、とかれは考える。「政治的改革。フランス革命」（J・八八九）が人類の発展の一過程として現れた、と一七九二年二月二九日のノートに記している。この期のリヒテンベルクが理念的にフランス革命に反対の立場をとっていなかったことについては、次の覚書からも読み取れよう。

一国民がその憲法を欲するがままに変えてよいものか。この問題に関しては非常に多くの当を得たこととくだらぬことが言われてきた。わたしはそれに対する最良の回答を次のように考える。決定されたものであれば、誰がそれを国民に禁止したいと思うだろうか。共通なもの（allgemein）となった諸原則に従って行動することは自然である。実験（Versuch）は間違った結果を生むこともあろうが、国民はともかく実験するに到ったのだ。この実験を阻止するには、大の賢人たちが優勢でなくてはなるまい。そしてこの大の賢人たちは多数の大の賢人たちを、あるいは多数の大馬鹿であってもかまわないが、指揮しなくてはなるまい。善人の理性と悪人の服従を常に同一の方向に導くためにである。（J・九七二）

ここでリヒテンベルクが指摘するのは、理性が了解し、「共通なもの」となった事項を道徳的尺度でもって押し返すことの不可能さ、無意味性であろう。

しかしながら、『付け込み帳』に記されたフランス革命に関する覚書から、徐々にペシミズムがにじみ出ていることも否定できない。このペシミズムがリヒテンベルクのフランス革命観に基調を与えてくるのも事実である。確かに当初、リヒテンベルクは啓蒙主義の原理に従って、フランス革命に対しては好意的であった。フランス革命の敵は、革命は「ごく少数の扇動的人々の所産」であると揶揄する。しかし、いったい大きな事件で、同時に多数者の所産であったものが、今までにあったかと反論する。（J・一〇九四）またフランス革命はそれが起

こらなかったとしたら、実現しなかった「幾多の善」を生んだ、とも書いている。（J・一一七二）

フランス革命の現実はしだいにリヒテンベルクにマイナスの印象を与え始める。「自由なフランスで、現在好き勝手に人を縛り首にすることができる。」（J・九三五）リヒテンベルクが特に憂慮したのは党派間の対立、争いであった。そこにはあまりにも独善が横行しているのだ。非常に強い口調でかれが弾劾するのは各党派の思考の停止なのだ。かれはそれぞれの党派に現実観察に基づく判断を要求する。リヒテンベルクにとっては平等、不平等のスローガンがすでに曖昧なのである。敵対する二つの党派の分別ある人たちの考えはそんなに掛け離れているのだろうか。一方の党派の言う平等とは他の党派の言う不平等は案外、呼び名こそ違え、同じ事を指しているのかもしれぬ。ならば、第三の「平等」で両者は手を打つことはできぬものか。「われわれの要求する平等は、最もがまんできる不平等である。」（K・一四四）平等の中にも恐ろしい平等はあるし、不平等の中にも恐ろしい不平等はある。ならば両者が歩み寄って、「良き中間状態」(gute Mittelzustände)が考えられはせぬか。しかし現実には、「中間的平等ないし不平等」は両党派が等しく忌み嫌うものである。「黄金の中間状態は両極端の党派の擁護者の争いによって勝ち取られるべきだ、と主張するのは、まったく苛立たしい限りだ。両者が疲労困憊する以外に、かれらにそうした気持ちを起こさせぬであろうから。その場合には第三者が容易に両党派を取り押えられるからだ。」（K・一四五）

「中間状態」とは類似的思索の産物である。すなわち、両党派における平等と不平等の認識を分析し、識別し、類似点を抽出する思考は、リヒテンベルクの好んだ方法である。こうして抽出された共有点を新しい妥協の場とする提案である。

リヒテンベルクは概念の固定化に反逆して次のようにも言っている。「今多くの人々が思っているような平等と自由を定めること、つまり十一番目の戒律を制定すること、それによって他の十戒は廃止されることになろう。」（K・一五三）いったいそのような平等があろうか。リヒテンベルクはさらにのべる。「諸身分の不平等にもかかわらず、人間がみんな等しく幸福でありうることは疑問の余地がない、とわたしは考える。ぜひ各人をできるだけ幸福にするよう努めてもらいたい。」（K・一六〇）イギリスの立憲制に寄せるリヒテンベルクの愛着は、ハノーヴァー宮廷とイギリス王室の密接な関係が多分に影響しているわけだが、その制度は「共和制の自由」と「君主制」を混合し、民主主義が純粋な君主制あるいは専制政治へ転化することを妨ぐ。（K・一四九）これも第三の道の思考に沿ったものだ。

リヒテンベルクはフランス革命の抱える困難に目を向ける。自由、平等、友愛を掲げる共和国の建設は性急には実現できないことを見抜いていた。「打倒した君主制の素材から一つの共和国を建設することは言うまでもなくむずかしい問題である。石材を別様に切り出さないことには事が進まない。それには時間を必要とする。」（K・一六七）現在の（＝一七九六年）憲法にはロベスピエールの独裁と同様、フランス国民の目的に合致しない、フランスのような大国は、将来「君主の統治」でしか治められないことが、回り道をしたあげくやっと国民は分かったのか、とリヒテンベルクは自嘲気味に記している。（K・二九五）一七九六年一〇月一九日から書き始められた『付け込み帳』の「L」にはリヒテンベルクの陰鬱な気分を反映する記述が目立つ。それは革命に対する期待と現実の落差の認識に因るものであろう。

「諸身分のもっと大きな平等」（J・一二〇二）をスローガンに掲げる「サンキュロティズム」（J・一二〇一）は幻想にすぎぬ、という類のペシミズムはノート「L」に散在する。一七九六年一〇月二八日の記述によれば、「共和主義の制度があらゆる不幸を完全に免れるというのは夢だ、単なる思い付き（Idee）だ。」（L・三四）

ただし、リヒテンベルクの覚書がパリの政治闘争を逐次追跡している事実も見逃せないであろう。一七九四年、ロベスピエールに反対するテルミドール派はロベスピエールらを処刑した。かれらは一七九五年、新しい憲法の立案に着手するが、かれらの狙いは民主主義と独裁制の双方に歯止めをかけることであった。[17] リヒテンベルクのこれらの記述は、かれの思考の粋の中で組立てられたアフォリズムと言うより、現実描写に近い相をもつ。だからリヒテンベルクの『付け込み帳』の覚書にはリアリズムとして解読できる部分も多々あると思われる。

革命運動は迷宮に迷い込んだかに見える。もはやリヒテンベルクにとって「啓蒙主義」は生ける屍のように生気を失ってしまった。「ゴモラのシトワイエン」（K・三四二）とか、「サ　イラ、カーイラ、カーイラ　カイロ」[18]（„Ça ira, Ca-ira, Kahira Kairo“ L・六八〇）など、フランス革命の決まり文句が退嬰的に綴られる。自由の木についての考察もしだいに辛辣になっていく。当初はまだ自由の木とは何だろう、と笑い飛ばしていた。「フランスの自由の木をリンネ流に叙述すれば、すぐれた諷刺が生まれるかもしれない。」（J・一一四八）しかし、今や自由の木は人を抑圧する道具と化した。リヒテンベルクは記す。「しかしこれはまことに自由の木に吊すことではないか。」（L・四九四）すぐ後に簡潔に「自由の木という絞首台」（L・四九五）と呼ばれる。フランス革命の一つの象徴である自由が、抽象の世界を離れ、ある物に具象化されると、その役割も具象的になる。自由は抑圧する！　事物の分析、比較に留まる限りにおいて、観察は啓蒙主義の限界の内部を闊歩していたが、今や現実の方が啓蒙主義の枠を越えて進んだ。

五

リヒテンベルクはフランス革命を「哲学の仕事」（J・三八〇）と見なす。革命を準備したのは「ルソー、ヴォルテール、メルシエ、レーナル」（J・三六六）であるとも言っている。リヒテンベルクにとって、フランス革命はまさしく啓蒙主義の理性が市民、民衆と結託して実現させた意味での「哲学の仕事」であった。

リヒテンベルクがフランス革命の理念と現実を検証する尺度として用いたものの一つに自由の概念がある。かれは言う。「どのようにして人間は自由の概念に到達したのであろうか。これは常に大きな問題であった。」（J・二七六）自由とは専制政治の抑圧からの自由でもあり、人間の本性を享受する自由でもある。哲学的にも究め難いもの、それが自由の概念である。近代哲学の要請たるデカルトの「われ思惟す、ゆえにわれ在り」（Cogito ergo sum）から「いざ、バスチーユ」への「飛躍」（J・三八〇）はリヒテンベルクにとってないがしろにできぬ哲学的課題であった。哲学の言う自由を人間の思惟はどの程度に享受できるのか、人間は自由な存在なのか、どんな意味において自由なのか、などの問題がかれの頭を悩ませていた。リヒテンベルクは人間の思惟に依然として懐疑的であった一人である。「コギト」を「われ思惟す」と訳すのは便宜であって、「考えるものがある」（„Es denkt“）と、非人称的に表現すべきではないかとのべる。人間が思惟の主体と

なることには無理がある。人間はせいぜい自分の感情、心像、思想の「存在（Existenz）を識別しているにすぎない。」（K・七六）ある概念が人間から独立して現存するか、そうでないのか、人間は自分でそれを明確に認識することはできない。リヒテンベルクがフランス革命の進展を眺め、自由がどうやら取り違えられているのではないか、と観察するのも、こうした哲学的逡巡があったからだ。

存在と非存在の両概念はわれわれの精神の装置の中ではただただ測り難いものである。なぜなら、本来われわれには存在とは何かが全く分かっていないのだから。われわれが定義と係り合うや否や、どこにもない何物かが存在していることを認めざるを得ない。カントもそのような事をどこかで言っている。（J・九四三）

諸原因のおぼろげな心像の上に、われわれがそれについて何も知らぬ、そして何も知ることのできぬ一人の神への信仰が打ち建てられたことは全くもって驚くべきことである。なぜなら、世界の創造者へのあらゆる推論はすべて常に擬人観（Anthropomorphismus）であるからだ。（J・九四四）

人間の理性が提示できぬ一種の朦朧とした世界をキリスト教は体系づけようとする。擬人主義は厳密な定義を拒絶する。ここにわれわれは反キリスト教の立場からの、リヒテンベルクのカント哲学への傾倒をみることができる。「聖なるキリストや復活祭の卵みたいな事情がここにある。それらがどこから来たかを知るや否や、人はそれらをもはや欲しくなくなる。」（L・一三六）

リヒテンベルクはフランス革命の経過を、不可解なる自然を内にもつ人間観から考察している。カント哲学はかれにとって、広大な宇宙に思いを寄せる媒体ではなかった。カント哲学は「顕微鏡」のように内面の「星の運行」（J・七二四）を探求する。カント哲学によって、外界の諸原因は人間の内部にその対応物を発見するのである。まさしく「われわれがどこを見ようとも、われわれは自分自身を見るだけである。」（J・五六九）

リヒテンベルクのフランス革命理解に果したカント哲学の効果は、革命に対する人間的理解にある。「実験政治」たるフランス革命はリヒテンベルクにとって、同時に人間理解の実験の場でもあった。いわゆる「自由な行動」が実は「機械的」運動であったりする。われわれの「感情」は「時計」（J・二七五）が正しく動いている様を自由な行動だと、信じないとも限らない。

われわれは自然の至る所にある確実さをさがし求める。しかし、それらはすべてわれわれ自身の自然のおぼろげな感情の配列以外の何物でもない。われわれが自然の中に見出す、あらゆる数学的法則はその美しさにもかかわらず、わたしには常にいかがわしいものだ。それらはわたしを喜ばせはせぬ。それらは補助手段にすぎない。近くで見ればすべては本物とは違う。（J・一八四三）

「いろいろなイデーで実験しなくてはならない」（K・三〇八）とは革命の人間的理解に関して当てはまるものである。

フランス革命の進展に伴う否定的諸現象（例えばテロル）の観察において、革命の推進力としての「情熱」（„Leidenschaft"）をどうとら

えるかは、ある意味では、近代国家の歴史的性格を考える際、避けることのできない問題である。この問題に大きな関心を向けたのがヘーゲルであった。『歴史哲学』の「序」に言う。「歴史を一瞥して納得させられることは、人間の行為は人間の欲求、情熱、利害、性格、才能から始まること、それもこの活動の劇の中で、原動力として現れ、主たる作用として登場するのはこれらの欲求、情熱、利害にすぎない、ということである。なるほど、この劇の中には普遍的目的、善意、気高い祖国愛はある。しかし、これらの美徳や普遍的なものは世界やそれが作り出すものと比べると取るに足らない。われわれはなるほどそうした主体自身の中に、それらの作用圏のなかに、理性の決定が実現されているのを見ることができる。しかし、それらは人類の大多数と比べると数は少ない。同様にそれらの美徳がもつ存在範囲は比較的小さな広がりしかない。それに反し、情熱、個々の利害の目的、利己心の充足は最も強力なものである。[19]」ヘーゲルは歴史の運動の中に「理念」と「人間の情熱」という二つの契機を指定した。そして「理性」は「情熱」を働かせ、それを「対立と闘争」に巻き込ませ、自らは傷つくのを避ける。これをヘーゲルは「理性の狡智」[20]（*„List der Vernunft"*）と呼ぶ。

リヒテンベルクはフォルスターと並んでフランス革命の推進力一つとして「情熱」を看破している。問題はこの二人の情熱に対する評価の違いである。フォルスターは一七九三年三月末、マインツ革命政府の代表として、マインツのフランス共和国との併合決議を携えてパリに着き、翌年一月一〇日にパリで没すまで、フランス革命の政治、社会情勢を眼の当たりに見た。かれは革命を押し進める力を現実から観察し、それを「世論」と「情熱」の中に見た。おそらくそれらはフォルスターのイギリス体験を抜きにしては考えられぬであろう。すでに『ウィルヘルム・ドッド博士の生涯』（一七七九）にみられるように、フォルスターはイギリス社会における世論の重みを早くから経験していた。人間の行動の原動力たる情熱もまた、クック以来のイギリスの交易史の考察からの帰結であった。フォルスターはヘーゲルのように理性を「狡智」にさせてはいないが、ヘーゲルと同じく、近代社会の暴力的発展と啓蒙主義の描く人類の未来の発展像との間の矛盾に苦しんだ一人である。

一七九三年の春であろうか、リヒテンベルクは「サンキュロティズム」（J・一二〇一）と一語だけ記した後、次の覚書を書いている。「かれは人間の情熱に向かって、あたかも情熱が突撃を開始せよ、と命令されているかのように、語りかけた。」（J・一二〇四）これはおそらく革命の扇動家に対する揶揄であろう。明らかにリヒテンベルクはフォルスターと違い、実践における情熱の役割を努めて過小評価ないし、嫌悪しているようだ。扇動とはリヒテンベルクにとって、「思いつきの銀河宇宙」（J・三四四）から降り注ぐ、根拠のない戯言の雨にすぎなかった。「言辞（Wörter）の世界」（J・三五七）、「濫喩（„Katachrese"）（J・四一〇）、「言辞が無限に濫用される」（J・六六一）、などの記述も悪しき扇動を暗示していると思われる。

そもそもドイツの「シュトルム・ウント・ドラング」の文学運動に対して、精力的に反論を試みた一人がリヒテンベルクである。『付け込み帳』にもなお次のような書き込みがある。

小説を読むことによって堕落した一人の娘と一人の若者が叶わぬ恋のため、続けさまに相手を自殺へと仕向け、それにより有名

になろうとする様を描けば、全くもってこざっぱりした話が生まれるであろう。娘の方はヴェルテルによって、若者の方はレーゲンスブルクのお嬢さんよって誘惑された末、そのような決心をしたとしてもかまわない。ただし、かれらは本気で恋していなかったので、この話からは笑止千万な状況がいろいろ生じるだろう。（J・七三五）

リヒテンベルクは革命家の情熱であれ、ヴェルテルの情熱であれ、それを一笑に付そうとするのである。それでは理性が革命の指針とみなせるかと言えば、もはやそうとは言い切れなかった。「自然科学（Naturlehre）は少なくともわたしにとっては、もし出しゃばりの理性が負債を作ったときには、宗教のために積立てる償却基金（Tilgungs-Fond）となる。」（J・一八二八）もちろんこれはフランス革命に関する記述ではないが、理性も間違いを犯しうることを示唆したものである。しかし、自然科学が信頼できるかとなると、それも疑わしい。「あらゆる数学的法則」は「常にいかがわしい」ものなのだ。

だからリヒテンベルクは最終的にはかれ独自の人間的解釈でもって、フランス革命の方向づけを行おうとする。事は古代の協議のごとく、「心」（感情）と「理性」による「二重の配慮をもって」成されねばならない。「激しい情熱」も、「純粋な理性」（L・三七九）も避けなければならない。フランスの情勢を眺めるに、リヒテンベルクにとって最も重要に思えたものは、「政府の継承」であった。そのためには、政府が着る衣服の「裁断」を専門の「ギルド」に任すべきではなく、人間のなかにある「一つの原則」によらねばならない。人間とは「頭」（„Kopf"）と「心」（„Herz"）から成る存在である。その人間のメカニズムに習って、「純粋理性の専制」と「政治的民主主義」（L・四〇三）は共存しなくてはならない、とリヒテンベルクは考える。そうした共存をかれは「中道」と呼ぶが、現実的にはそれは一つの妥協な道であろう。

二六歳のとき、リヒテンベルクは次の語句を書き留めている。「理性と空想力は、かれにおいて大変不幸な結婚生活を送ってきた。」（B・二七五）そして、常に「全人」（„the whole man" B・三一）を人生の目標にしてきた、この啓蒙主義者はフランス革命の激動を前に、自らの人生の指標たる、「頭」と「心」の分別ある結婚を願望したのである。革命の両極の党派の歩み寄り、つまり中間の道を提起するリヒテンベルクの思考は、後期啓蒙主義の置かれた新しい文学思潮の位置をも示唆して、興味あるものがある。

注

（1）船越克己「フランス革命とドイツ文学―フランス革命二〇〇周年に寄せて―」ワイマル友の会「研究報告」十五、一九九〇年、七七―八四頁参照。

（2）Vgl. Hans Henning: Die Entwicklung Weimars in der Zeit der Emanzipation des Bürgertums und im Jahrhundert Goethes 1750 bis 1830. In: Geschichte der Stadt Weimar. Hg. von Gitta Günther und Lothar Wallraf. Hermann Bohlaus Nachfolger Weimar ²1976, S. 230-337

（3）Goethes Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Bd. 10. Hg. von Erich Trunz. Verlag C. H. Beck München ⁷1981, S. 235.

(4) Goethes Werke. Hamburger Ausgabe, Bd. 2. ^{12}1981, S. 7.

(5) Wolfgang Rödel: Forster und Lichtenberg—Ein Beitrag zum Problem deutsche Intelligenz und Französische Revolution. Rütten & Loening Berlin 1960.

(6) ebd. S. 124.

(7) リヒテンベルクは『付け込み帳』に次のように記している。「マインツとヴォルムスの羊たちはシュトラースブルクの狼どもに〔……〕ライン川を濁らせてやった〔ということだ〕。」（L・五一二）

リヒテンベルクのテキストの引用は次の版による。

Georg Christoph Lichtenberg, Schriften und Briefe, 4 Bde. Hg. von Wolfgang Promies. Carl Hanser Verlag München 1967-71.

(8) W. Rödel: a. a. O. S. 158.

(9) ebd.S.167.

(10) ebd. S. 167.

(11) いわゆる『付け込み帳』("Sudelbücher") の番号も注（7）の Promies 版のそれに従う。

(12) vgl. W. Rödel: a. a. O. S. 115 ff.

(13) ebd. S. 124. それをさらに詳細にのべているのが本書の結論部分（一八〇—一八一頁）である。

(14) Franz H. Mautner: Lichtenberg. Geschichte seines Geistes. Walter de Gruyter & Co. Berlin 1968, S. 461.

(15) Etymologisches Wörterbuch des Deutschen Q-Z. Akademie-Verlag Berlin 1989, S. 1422.

(16) Siglinde Eichner: Die Prosafabel Lessings in seiner Theorie und Dichtung. Ein Beitrag zur Ästhetik des 18. Jahrhunderts. Bouvier Verlag Herbert Grundmann Bonn 1974, S. 185.

(17) 河野健二『フランス革命』世界の歴史—一五、河出書房新社、一九七九、二一四頁参照。

(18) Ça ira はフランスの革命歌。

(19) Georg W. F. Hegel: Sämtliche Werke, Jubiläumsausgabe in 20 Bänden. Bd. 11. Hg. von Hermann Glockner. Fr. Frommann Verlag Stuttgart 1961, S. 48.

(20) ebd. S. 63.